

令和 2 年 5 月 21 日現在

機関番号：14301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K13330

研究課題名(和文)「北朝の漢化」再考 - 非漢族による文化の保持と伝承の観点から -

研究課題名(英文) Reconsider "Hanhua" during the Northern Dynasties

研究代表者

池田 恭哉 (Ikeda, Yukiya)

京都大学・文学研究科・准教授

研究者番号：50709235

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、中国南北朝時代における北朝の「漢化」について、北朝の漢文化への単純な同化という従来の側面からではなく、北朝が如何に漢族の文化を吸収し、消化していったのかという側面から、再考することである。

研究の過程では、南北両朝を統一した隋朝において、文化政策の取りまとめ役を担った牛弘に特に着目した。彼は北朝の出身ながら、南朝の礼文化を積極的に取り入れて隋朝に独自の礼学体系を構築した一方、しばしば南朝の礼学に対する批判意識を垣間見せた。本研究では、この牛弘など隋代士人を介して、隋朝における南北両朝の文化の融合と相克の諸相が、多面的に明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の研究では、中国南北朝時代における文化的な交渉は、専ら北朝の側が一方向的に南朝(漢族)の文化を受容し、それに同化していった過程とされてきた。それに対し本研究では、南北両朝を統一した隋朝に着目し、その文化政策の取りまとめ役の任を担った牛弘らを考察対象とすることで、隋朝の文化の実態を多面的に描出し、翻って北朝が南朝の文化を如何に吸収したのかを浮き彫りにすることに成功した。これは、これまで看過されてきた北朝とそれを継承した隋朝の文化に独自の意味を見出したものとして、学術的な意義を有する。加えて、異文化の多彩な交流の側面を描出しており、社会的意義も十分に持ち合わせていると言える。

研究成果の概要(英文)：Though "Hanhua (漢化)" during the Northern Dynasties have been thought as cultural assimilation, we need to reconsider this problem from another aspect. That is, how the Northern Dynasties absorbed the culture of the "Hanzu (漢族)". In order to achieve this purpose, I focused on the Sui (隋) dynasty which unified the Northern and Southern dynasties. As a result, I succeeded in expressing the importance of Niu Hong (牛弘) who was the cultural leader at this time.

研究分野：中国哲学

キーワード：北朝 漢化 牛弘 辛彦之 『隋書』 王儉 儀注 王通 『中説』

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

北朝の漢化について、従来の研究は、特に北魏の孝文帝が洛陽へ遷都して以来、北朝は漢化の一途をたどったとし、漢化の実態を着実に明らかにしてきた。だが非漢族政権が漢文化への憧憬から漢化したという図式を自明のものとし、北朝が漢族の文化を吸収し、消化した上で、どのような北朝独自の文化を構築したのかを解明しようとする意識は、希薄であったと言わざるを得ない。

これを反省するのが川本芳昭『魏晋南北朝時代の民族問題』(汲古書院、1998年)である。氏は五胡十六国から北魏を経た北朝における漢化は、決して中華への同化ではなく、新たな中華の創造であったとする立場から、非漢族王朝による北朝の支配が、従来の中華にどのような新たな面をもたらしたのかを考察した。そのスタンスは、同氏『東アジア古代における諸民族と国家』(汲古書院、2015年)にも貫かれている。

また北朝を対象とした研究は、とりわけ歴史学の分野で盛んに展開されてきたが、五胡十六国、北魏、東西両魏、北齊・北周という個別の王朝の特質を、北朝として一括りにせず見極めていくこと、さらには南北朝を統一する隋とその先の唐をも見据えた形で、北朝の各王朝を一連の北朝史の中に位置付けていくこと、などの課題があった。この視座は、陳寅恪『隋唐制度淵源略論稿』(中華書局、1963年)や谷川道雄『隋唐帝国形成史論』(筑摩書房、1998年)を代表とする諸研究に一端がうかがえ、王朝の支配制度から地方の共同体に至るまで、様々な階層を対象に隋唐の淵源としての北朝史を描いてきた。

だが思想史の分野では、例えば北朝の仏教文化などを取り上げる研究はあっても、北朝の知識人たちがどのような思想の営みを為していたのかについては、研究が少なかった。そこで、これまで顔之推や盧思道、劉昼や甄琛といった北朝人を取り上げて、彼らがどのように北朝社会の中に自らを位置付けてきたのかということに関して進めてきた自らの研究を、さらに継続し発展させることを企図したのが、本研究である。

本研究では、以上の北朝史およびそこでの思想史に関する研究状況に対して有した認識に、川本氏の見解を加えることで、漢化を非漢族文化と漢文化の融合と対立の両側面から再考し、そこに生み出される新たな北朝史を描出したいと考えたのである。

2. 研究の目的

本研究では、北朝の漢化を、北朝による一方的な漢文化の受容という従来の見方で考えるのではなく、北朝による漢文化の受容のあり方、そしてそこから構築した独自の文化の実態を、詳細に検証することによって、再考することを目的とする。その際、北朝を一括りにして単一的に見るのではなく、常に南朝と対比した形で、かつ南北両朝が統一された隋朝での動向をも見据えた形で、考察の俎上に載せることに留意する。こうすることで、漢化を経つつも新たに展開した北朝の文化が、どのように南朝の文化と融合し、また反発したのかを、精査することが可能であると考える。

3. 研究の方法

本研究の遂行において、重要な位置を占めるのが、南北に分断されていた王朝を統一した隋朝である。隋朝では、南北朝時代に生まれた士人たちが、なおも王朝の主たる人物として活躍し、南北両朝の文化を融合・相克させつつ、新たな文化を構築していった。そうした隋朝における南北両朝の文化の融合・相克の諸相を探ることは、翻って北朝における独自の文化の存在を明るみに出すことにつながるのではないかと。

以上のような目論見に基づき、隋朝の文化政策の推進における中心的な役割を担った牛弘に着目した。牛弘は北朝の北周の出身であるが、隋朝に仕えてからは、民間に眠る書籍の収集や、礼楽文化の象徴としての明堂の造営の提起、隋朝における儀注(礼の儀式における式次第や細則)の整備など、隋朝の文化の基礎を形作ったと言っても過言ではない。そこで牛弘の事績を、『隋書』に見える彼の列伝を中心に整理し、それが隋朝の礼制や文化にとって有した意味を考察する。また牛弘は、辛彦之など何人かの特定の人物と、協働して文化事業を営んだ面があり、そうした牛弘の周囲の人物の動向についても、十分に留意する。

牛弘はいわば朝廷にあって独自の隋朝文化の形成に寄与した人物であるが、一方で在野では王通を取り上げる。彼は『中説』の著者として知られるが、これに対しては、すでに「王通『中説』訳注稿」と題して、訳注を施してきた((1)~(3))をそれぞれ『香川大学教育学部研究報告 第部』143,145,147号に掲載)この訳注に関しては連載を継続し、王通が語る南北両朝の文化への認識を探る足がかりにしたい。

4. 研究成果

研究の方法において示した牛弘をめぐる研究は、次のように進展した。以下、行った口頭発表と、それに基づいて公表した拙稿に依拠しつつ、その成果について述べる。

まず2017年度、「隋における牛弘の位置」と題した口頭発表を行った(第二回アジア史連絡会)。この中で『隋書』の牛弘伝を丁寧に読解し、その事績をたどることで、牛弘が新たに南北朝を統一した隋朝に対して如何なる課題を見出し、それに対してどのような文化的な政策を打ち出そうとしたのか、そうした諸観点を考察するための基礎作業をした。そしてこれを受け、2018年度には次の二本の論考を発表した。

第一は、「牛弘「請開献書之路表」訳注」(『香川大学国文研究』43号、2018年)である。牛弘は、隋朝の開朝に伴い、民間にあって朝廷には未所蔵の書物を、懸賞付きで収集する政策を打ち出し、それを「請開献書之路表(献書の路を開くを請うの表)」として上奏した。本論考は、この上奏文に対して詳密な訳注を施したものである。その内容の具体的な考察は、次の第二の論考での紹介に譲るが、この訳注の作成の過程で、新たな研究の展開をも見出し得たことを付記しておく。それは、この上奏文の中に、北朝における蔵書の実態やそれに対する扱いが、牛弘によって細大漏らさず語られており、隋朝から遡って、北朝諸王朝での漢籍に対する認識をうかがう契機となり得たのである。この点については、また改めて考察する機会を用意できればと考えている。

第二は、「隋朝における牛弘の位置」(『中国思想史研究』40号、2019年)である。そこでは上述の第一の成果を基礎に、隋朝の文化政策を牛弘が実際どのように推進したのかについて、牛弘の様々な事績に即して考察した。

まず上述の「献書の路を開くを請うの表」に対する考察である。これをめぐっては、牛弘が天下の書籍を広く収集することの提言を通じて、武力により北朝をまとめた隋・高祖に対し、文治への方針転換を迫ったことを明らかにした。漢籍という漢文化を代表する「モノ」が、北朝のこれまでの政治システム(武治)と対置された事実が、浮き彫りになったのである。

そして書籍収集は、牛弘が主張した明堂の造営とも関係した。牛弘は、様々な文献に依拠した明堂の造営を思い描き、造営を願い出た上奏文には、実際に(古典から同時代に至るまで)多くの文献からの引用が見受けられる。つまり自身の明堂像により説得力を持たせるためには、より多くの蔵書を国家が有している必要があり、その影響下に書籍収集の訴えはあったとも推定し得るわけである。

さらに牛弘は、隋代の礼制の構築の中心的な人物であった。彼は『隋朝儀礼』百巻を主編するとともに、数多くの国家的な礼の議論に携わった。その過程で、彼が(従来の礼学者が主として依拠した)経典などよりも、むしろ柔軟な礼の運用を意図してか、儀注を重視していたことを見出し、それがその他の隋朝の学者とも共通する部分が少ない点を指摘した。今後は、なぜ牛弘を含めた隋朝の学者が、儀注を根拠に礼体系を構築しようとしたのかを、隋代に伝存した文献を視野に入れて分析することが、課題となる。

さて上記の『隋朝儀礼』はすでに残存しないが、その内容については、様々な史料(『隋書』礼儀志など)を検討することによって、多少なりとも明らかにし得る。そこで『隋朝儀礼』の内容と、そこに取り込まれた前代の礼の議論について考察したのが、2019年度に行った口頭発表「牛弘と隋代礼制—以『隋朝儀礼』为主(牛弘と隋代礼制—『隋朝儀礼』を中心に)」(中国語、第八届中国経学国際学術研討会)である。そこでは『隋朝儀礼』の成立をめぐる史料を博捜し、『隋朝儀礼』が主として南斉・王儉の礼学を淵源とするものであったこと、牛弘自身もかなり王儉を礼学の先人として意識していたことなどを明らかにした。一方で牛弘は、北朝の出身であり、しばしば南朝の王儉らに対する批判意識を垣間見せた。王儉の礼学についてもより深く検証し、それが南北朝の礼学を吸収した牛弘にどういった影響を及ぼし、如何に隋朝の礼制の中に反映されたのかを考察することが、今後の課題となってくる。

また牛弘とともに隋朝礼制の構築に中心的な役割を果たした辛彦之をめぐる研究を進めた。まず2018年度に口頭発表「辛彦之の没年をめぐる一考察」(第38回六朝学術学会例会)を行い、それに基づいて、2019年度に一本の論考を活字化した。それが『隋書』の成立とその問題—辛彦之の没年と明堂の議論から』(『六朝学術学会報』第21集、査読有)である。

辛彦之について、『隋書』に見える列伝には開皇11年に没したと明記されるが、同じ『隋書』の礼儀志には、彼が開皇13年、明堂をめぐる議論を牛弘と連名で提起したと見える。この齟齬について、礼儀志の開皇13年を3年に改めるべきとする先行研究が複数存在し、一見それは、牛弘が開皇3年に明堂建造の上奏をしている事実も手伝って、見事な解決策となる。だが礼儀志を仔細に読むと、開皇3年に改めた場合、それはそれで新たな矛盾がいくつか生じることが明らかになった。そこで『隋書』の列伝と志の成立過程を丁寧にたどることで、辛彦之の没年はやはり列伝の言うように開皇11年であり、礼儀志の記事が、開皇3年と13年にあった明堂建造についての記事を混在させてしまった結果のものである事実を示すことに成功した。

また考察の過程で、『隋書』の成立についても新たな見解を提示し得た。従来『隋書』という書物は、先に列伝が完成し、それとは別個に志が編纂され、列伝に志がそのまま合体させられる形で成立したものと見做されてきた。だが実際のところ、列伝と志の間には相互参照を要求する記載などがあり、現行『隋書』は個別に編纂された列伝と志が単純に合体したのではなく、そこに多少の編集の痕跡が見られたわけである。隋一代に限らず、南朝と北朝の双方の文化・制度についての重要な情報をもたらす『隋書』の性格が、本論考により明らかになった。

さて以上は隋朝の国家的な文化事業の推進に活躍した牛弘や辛彦之をめぐる研究であったが、在野で活躍した王通について、その著作『中説』の訳注稿も着実に連載を継続し、2017年度に「王通『中説』訳注稿(4)」(『香川大学教育学部研究報告 第 部』149号)を、2018年度に「王通『中説』訳注稿(5)」(『香川大学教育学部研究報告 第 部』151号)を、2019年度に「王通『中説』訳注稿(6)」(『香川大学教育学部研究報告』2号)を、それぞれ発表した。その中では北魏・孝文帝による漢化政策に対する評価など、北朝を隋朝の目から見た場合の発言が多く見受けられた。今後も継続して訳注稿を公表し、隋朝における南北朝の消化・吸収の実態を探る基礎としていきたい。

以上のように、本研究では隋代に活躍した複数の知識人を取り上げ、彼らが南北朝を統一した隋という時代にあって、どのように過去の文化、礼制を消化吸収し、また独自の文化、礼制を構築していったのかが、明るみに出た。今後はその考察範囲を拡充していきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 池田恭哉	4. 巻 2
2. 論文標題 王通『中説』訳注稿（6）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 香川大学教育学部研究報告	6. 最初と最後の頁 11,28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池田恭哉	4. 巻 21
2. 論文標題 『隋書』の成立とその問題－辛彦之の没年と明堂の議論から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 六朝学会報	6. 最初と最後の頁 65,81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池田恭哉	4. 巻 43
2. 論文標題 牛弘「請開献書之路表」訳注	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 香川大学国文研究	6. 最初と最後の頁 35,49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池田恭哉	4. 巻 40
2. 論文標題 隋朝における牛弘の位置	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中国思想史研究	6. 最初と最後の頁 1,29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池田恭哉	4. 巻 151
2. 論文標題 王通『中説』訳注稿(5)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 香川大学教育学部研究報告 第 部	6. 最初と最後の頁 11,28
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池田恭哉	4. 巻 149
2. 論文標題 王通『中説』訳注稿(4)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 香川大学教育学部 研究報告 第 部	6. 最初と最後の頁 1,19
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件(うち招待講演 0件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 池田恭哉
2. 発表標題 牛弘と隋代礼制 『隋朝儀礼』を中心に(中国語)
3. 学会等名 第八届中国經学国際学術検討会(於中国湖南大学岳麓書院)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 池田恭哉
2. 発表標題 辛彦之の没年をめぐる一考察
3. 学会等名 第38回六朝学術学会例会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 池田恭哉
2. 発表標題 隋における牛弘の位置
3. 学会等名 第二回アジア史連絡会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 池田恭哉	4. 発行年 2018年
2. 出版社 研文出版	5. 総ページ数 366
3. 書名 南北朝時代の士大夫と社会	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考